2021年　第9回　都市環境デザインセミナー

“泉流・まちとの関わり方”現在とこれから

日時　2021 年 12 月 16 日(木)　18:30〜20:30
場所　グランフロント大阪ナレッジキャピタル「都市魅力室」
（大阪市北区大深町 3 番 1 号グランフロント大阪　北館 7 階）＋Zoom 配信

＜趣旨＞

泉英明氏は、＜まちづくりの「まち医者」になりたい＞（2012　JUDI 関西セミナー）をモットーに、まちづくりに取り組み、大阪を拠点に、都市に関わる事務所の新しいカタチをつくりあげてこられました。これまでの都市計画コンサルタントとは一線を画す、都市デザイン事務所　有限会社ハートビートプラン。その代表者である泉英明氏に、今回は、「“泉流・まちとの関わり方”の現在とこれから」と題して、ご講演いただきます。泉氏が「まち」と関わる時に必ず考えること、チームづくりの極意から、所員に期待するポイントまで、そしてさらに今後の事務所の目指す姿をお話しいただき、将来の魅力あるまちづくりをめざす人々へのメッセージをいただきたいと思います。

これまで、大阪のまちを牽引していた方々からのご意見、エールも含めて、意見交換をいたします。奮ってご参加ください。

世話人　岡絵理子

＜内容＞

話題提供　（泉 英明）
“泉流・まちとの関わり方”現在とこれから

＜講師紹介＞

泉　英明（いずみ・ひであき）
都市プランナー、有限会社ハートビートプラン代表
大阪なんば、西梅田、豊田、岡崎、姫路のまちなか再生や公共空間のプレイスメイキング、工業地域の住工共生まちづくり、水辺空間のリノベーション「北浜テラス」「水都大阪」事業推進、「長門湯本温泉」の温泉地再生、市営住宅エリアの再生「大東市 morineki プロジェクト」などに関わる。
まちづくりの「まち医者」としての関わりを目指す。
著書に『都市を変える水辺アクション』(共編著、学芸出版社)、『民間主導・行政支援の公民連携の教科書』(（共著、日経 BP 社)

“泉流・まちとの関わり方”現在とこれから

泉　英明（有限会社ハートビートプラン）

お忙しいときにお越しいただき、ありがとうございます。JUDI の皆さまも、むちゃぶりどうもありがとうございます。山納さんも、会場ありがとうございます。HBP の業務紹介とか、どんなプロジェクトやってんねんという話は、結構いろんな所で話しているのですが、岡さんのテーマであるどんなことを考えてんねんっていうのは、実はあまりプレゼンする機会がないので、一から資料づくりしたものもあり、ぎりぎりまで資料がかかってしまいました。今日は皆さんにお伝えして、突っ込みを期待しています。

●仕事のはじまり

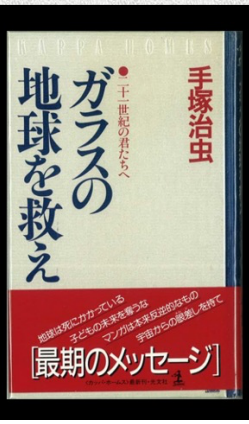
ハートビートプランという会社です。このメンバーで、今やってます。

ＨＢＰメンバー

うちの、若手チームは今日会場に来てくれてます。9 年前の 2012 年に、JUDI でお話しさせていただいたときに、まち医者みたいな都市プランナーになりたいって言ってました。これは今でも変わってません。当時のプレゼンをサイトで見ると、11 月 29 日にやっていて、こんな紹介をしてました。僕は東京出身なんですけど、両親は九州で、東京に両親が行って、生まれて、いろいろ旅行が好きで、電車や自転車で回りました。大阪に来た理由は、手塚治虫のマンガをたくさん読んで、その中に環境問題のことがたくさん書かれていて、結構暗い話も多いんですけど。その環境問題に興味を持って、大学を探したら大阪にしかなかったんですね。大阪だけは行くなと言われたんですけども、大阪に来ることになりました。

大阪に来て勉強するわけでもなく、ほとんどバイトして、お金ためてツーリングやバックパック旅行行ったりしていました。そこで石関さんという環境整備センター、僕が最初に就職する事務所の社長が、大学に非常勤講師に来てて、それで拾ってもらって 10 年間修行させていただくことになります。環境整備センターに勤めている途中に、鳴海先生が主催されている都市大阪創生研究会というのがあって、そこに参加をさせていただくことになり、そこが転機になって NPO にも参加することになり、10 年後に独立して今の状況になります。手塚治虫は全集を何冊も読んだんですけど、このような文章もあって、科学と人間のディスコミュニケーションや有限の地球のようなもの、これは結構今でも興味あるんですけどね。

手塚治虫の影響



地球は死にかかっている

鉄腕アトム：科学と人間のディスコミュニケーション

自然・生命の大切さ

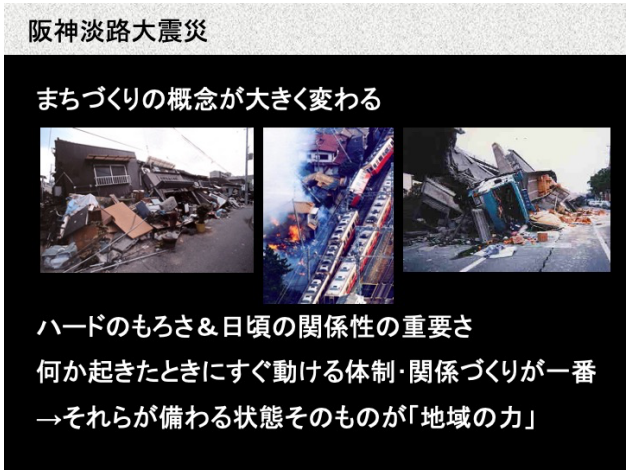
人間のエゴ

想像力こそが希望

→環境工学科へ入学

いろいろこんな旅行もして、いろんな価値観に衝撃を受けつつ、日本で何ができんのかみたいな話を考えていたところに、石関さんと都市再開発っていう授業の先生として出会いました。僕は街って、いろんな人のつくられた、いろんな活動の結果が今の街だっていう感じで思ってたんですけども、それを結果じゃなくて、自分たちでこう変えようっていう人がいるっていうことが、いろいろヒアリングをしてて分かって、そのときは金沢の香林坊とか武蔵ヶ辻っていうとこの再開発の地域ヒアリングに行ったんですけども。そこで、そういう人たちがいるっていうのと、そこに専門家が関わってる、そういう仕事があるんだっていうのを初めて知って、ぜひそれをやりたいなと。もともと地球環境に興味あったんですけど、身近なところから、それが始めていくのがいいんじゃないかと思ってそこに就職さしていただくことになりました。

そしたら1年目に、いきなり阪神淡路大震災が起きて、今まで授業や本で習ってたことはあったんですけども、ほとんどハードも崩れて、ここの震災の復興でマンション建て替えとか区画整理区域内の共同化みたいなことを携わってたんですけど、そこで気付いたのは、ちゃんと物とかハードは作ってたら大丈夫かっていったら、全然そうではなくて、きちっとハードができてたところが、復興が早いわけでもなく、当たり前の話なんですけど、何か起きたときに、すぐ動ける信頼関係とか、そういうネットワーク、知恵みたいな関係、普段の関係づくりがむっちゃ大切だなっていうのが分かって。そうじゃないところは、ずっと住民同士裁判していて何も進まないみたいなことを目の当たりにして、そういう地域の力の本質をこの阪神淡路で再認識したし、自分も今までの都市やまちづくりの概念が大きく変わったと思います。



●独立の経緯

独立当時は、最初は1人だったんですけど、これは前回、9年前、プレゼンしたときは、この写真を使ってたみたい。

3人で、ヒサオとアッコっていう3人なんですけど、ヒサオは今、自分のふるさとに戻って、鳥取県庁に勤めてNPOや環境のことをしています。アッコは旦那と大阪で結婚したんですけど、旦那が東京で事業を立ち上げたので、今、東京でやってるんですけれども、僕らの友達と一緒に、大田のオープンファクトリーという町工場を開く取り組みの事務局で、大田区の観光協会で面白くやってます。

石関は前職の環境整備センターのボスですが、ここでベーシックな仕事をさせていただきました。まずはマスタープラン系ですね。都市計画、用途見直し、住宅、密集事業、緑、市街地再

開発事業の準備組合支援など。また、この頃に中活法ができたので、ボスのカバン持ちで高松に行って、高松では 10 年ぐらいお世話になり独立してからもずっと行ってました。また、阪神淡路大震災の復興プロジェクトもやっていて、非常にいろんなことをたたき込んでいただき、むちゃ感謝してます。

相当厳しい人で、営業は全部自分でやってこいっていうのを 4 年目ぐらいに言われたんですね。営業はしたことがなかったので、いきなり飛び込みで行政の担当者などを訪問して、ニーズをくみ取ってこいって言われて。いろんなところに、こんにちはって行きましたが、話を聞いてくれないんです、全然。そういうことで、いろんな企画を作って持っていくんですけども、外に提案する前に、もちろん会社のチェックが要るんで、こういうことで提案したいんですって言ったら、クオリティー低いから出せない、うちの事務所に泥を塗るって言われて、どういうふうにしたらいいんですかと聞くと、それはおまえ考えろって言われ、八方塞がりな状況で悩んでました、その頃は。上司に聞いても分からない、こうしたらいいんちゃうかというアドバイスを反映させてもバツみたいなの、よくあって。営業も難しいし、社内のクオリティーチェックを通るのも難しい、今だったらパワハラちゃうかと思うぐらいの、厳しい感じでやったんですけども、それが功を奏して、独立できたっていうのもあるかなって、今考えれば思います。

当時はこんな、これは高松の 4 町パティオっていう、商店街の真ん中にある、商店街三つがクロスするとこにある、こういう危険な、よく痴漢とか怖くて、夜、女性が歩けないような場所だったんですけど、それを地元の人と商店街の人が再整備、きれいにして面白い使い方したいっていうのでスタートしたプロジェクトですね、これは。こんときに、今でもいろんな道路空間の活用みたいなのが出てきていると思うんですけど、ここも実は道路で、活用するとかプランニングするのも、将来使っていこうっていう商店街の若い連中や若いアーティストなどのメンバーで考えて、そこに商店街がお金を出そうっていうことで、運営もちゃんと自分たちでやりますよっていう人が当初から完成後も集まって創り上げたという感じで、ここも相当学びになりました。

また一つ勉強になったのが、中活って大体、当時は商店街が中心で時業展開しようっていうことで全国始まっていったんですけども、高松もご多聞にもれず商店街が非常に強力で、いろんな事業をやっていたので、商店街と一緒にやろうっていうことでお話するんですけど、必要とされないし全然進まないんですよね。商店街主体じゃなくどういうメンバーが街の担い手になるのか、街で今後ムーブメントを起こしていくときには、どういう人が何をしたいと思ってるのかって考えたときに、個人としての面白い市民や事業者がこの指とまれで出会い、化学反応を起こしていくのが面白

いんじゃないかっていうことで、地元の小西智津子さんっていう女性や三井さん、永峰さんらと一緒に、あとはTMO高松を担っている商工会議所の蓮井部長がそれを許してくださったこともあって、面白い市民主体の「まちラボ」のゲリラ活動が始まることになります。

■まちラボ活動（2002年度～）

この活動は月1回第3木曜日に、外にはPRしないんですけど、当初の数人のコアメンバーから口コミで10人、20人、30人ぐらいで、面白いと思う人だけ声を掛けて、1人ゲストスピーカーを呼んで、1時間話してもらって、その後1時間意見交換したら有志で飲みに行くってだけなんですけど、それを1年間繰り返しました。そしたら、すごい面白い人が集まって、最終的にはこういう、いろんな年齢性別や多様な仕事・趣味の人が集まってきました。その後高松のまちなかビジョンを自分たちでつくって実現していこうと企画が立ち上がり、その企画書を高松市や香川県や経済界などに提案していきました。多くのプロジェクトが実現していき、参加したメンバーの一部が「瀬戸内国際芸術祭」の立ち上げ運営にも深く関わるなど広がっていくのを目の当たりにしました。ゆるやかなネットワークであっても個々の強いモチベーションがあり本気を出したら街や世の中が変わるんだ、ということを身をもって体験しました。

これは阪神淡路大震災のプロジェクトで、芦屋のマンションです。倒壊して、管理組合から相談を受けて、設計事務所と組んで事業計画を立てて、デベロッパーをプロポーザルで選んで、どういう一人一人がどのように生活を再建するのかを話して事業を組み立てていきます。被災後マンションには住めないので、避難場所に行き、お一人お一人と話をして、戻りたいのか戻りたくないのか、お金の状況はどうなのか、全体の事業計画や市との補助金作業、銀行に行って抵当権を外して欲しいという交渉、各人の税金対策、みたいな作業をやってました。とてもやりがいのある仕事でした。

仕事を通じていろんなこと体験したのですが、悩んでいたのは、当時マスタープラン系にいろいろ関わるのですが、計画は策定されてもほとんどお蔵入りになってしまう。もともとは、右肩上がりのときには人口も増え財源もあり、マスタープランを作ればそれに基づいていろんなものが整備されてたんですけど、バブルもはじけてたし、お金もないですし、プランは作るけれども、誰のためのプランなのかよく分からないし、それが実行にも移されない。報告書を書くための業務みたいに感じてしまったんですね。そこに限界を感じて、こんなことをするためにこの仕事選んだわけじゃないと悩んでいて、そんな時に都市大阪創生研究会っていうのがあるっていうのを知りました。当時、事務所は研究会に入っていて、一つ先輩の根津さんは参加していて、研究会の事務局をされていた森山さんという人に相談して、鳴海先

生につないでいただいて、視野を広げたくどうしても入りたいっていうのをお願いしました。

ここには数十社の大阪の企業や大阪市も参加していて、各社の若手のメンバーが入って、何か面白いことしようっていう研究会だったんですけど、そういうつながりは僕は全然なかったんです。阪神淡路大震災で若手ネットワークっていうのがあって、大阪と神戸のコンサルチームがすごい仲良くなってて、結構情報交換してたんですけど。大阪ではコンサルタントじゃなく、他業種の企業の仕事のつながりとかもなかったんで、入りたいって言ったら、石関さんは駄目だと。仕事をしなさいと、そんなことやってる場合じゃないでしょっていうふうに言われて。

駄目だって言われて、鳴海先生と森山さんにお願いして、石関を口説きに来てもらうことまでして、ようやく石関さんも認めてくださって入ることができました。入ったらいきなり水辺のチームのリーダーやれって言われて、これが後から考えるとすごいありがたかったんですけど。大阪の川・水路・海沿いなど水辺を全部歩いて、大阪の汚く避けられている水辺をどう楽しくしようかっていうのを、メンバーと考え始めました。僕、今は結構な水辺オタクになってますけど、当時は全然水辺とか知らずに、たまたま、水辺チームに入ってリーダーにさせられて頑張らなきゃと思ってやったっていう感じなんですけども。そしたらリバーカフェっていうのを、みんなでやろうっていうことになり、これが実現したっていうのも、非常に私の中では大きかったです。

●水辺との出会い

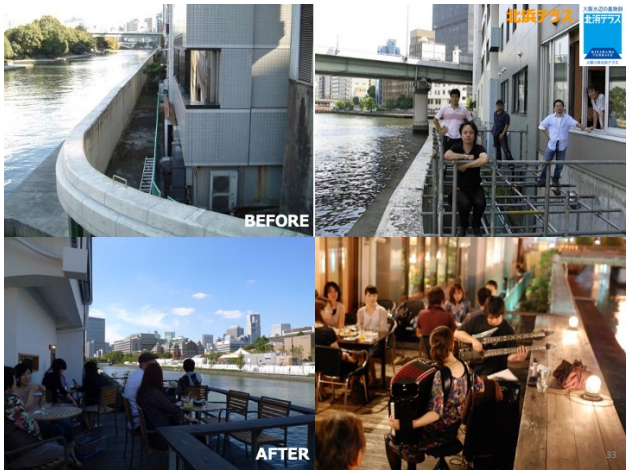
いろんな大阪の水辺、こうなったらいいという提案はいっぱいやるんですけど、ほとんど実現してないことがわかり、実際に自分たちで、素人なりに調べながら、師匠の山崎勇祐さん、伴一郎さなど水辺で遊んでる悪い大人たちに本当にいろいろ教えてもらいました。行政の口説き方とか、こうやったら面白いぞとか、こういう人がこう助けてくれるぞっていうのを、いろいろ教わりながらやったのが、この創生研のリバーカフェプロジェクトです。みんなが、こんなんあったらいいっていうのを出して、7カ月間で実現しました。これは仕事が終わってから、ユウスケさんのBARが大正にあったんですけど、そこに行って、10時ぐらいから打ち合わせを始めて、作戦会議をして、12時に終わり、そこからまた飲んで帰ったりすると大体2時、3時みたいなものを結構続けてました。場所は、対岸にタグボート大正という水辺の拠点がある尻無川の北岸です。全部これは自分たちでやったんですね、お金がなかったんで。結局、全部350万ぐらいかかったんですけど、僕らの収入は、ビールなどの飲料と水上レストランの飲食収入が全てだったんですけど、赤字が出たら、このメンバーで割ろうっていうのは、最初から決めてはいたんですけど、収入がぎりぎり350万ぐらいになってぎりぎりセーフになり安心しました。この体験を経て、企画書などのペーパーで見せるんじゃなくて、実際に期間限定でもリアルにやってみて将来の夢を共通体験すると、非常に共感が広がるんだな、こんなやり方があるのかということがとても衝撃的と感じたことを今でも鮮明に覚えています。

そういうことをやってたら、鳴海先生に声をかけていただいて、李さんっていう変なおっさんがいて、このおっさんがNPOを立ち上げる言うてん

でというので、立ち上げ時の会員になったらどうかと言われ会員になることになり、これもすごい面白い転機になりました。李さんも面白い人で、繁昌亭がない時代から天神さん、大阪天満宮の前でペンションを経営していて、当時は相当海外からもお客さんが来ていて評価もすこぶる高い珍しいペンションだったんですけど、それをしながらコンサルタント業もやってました。なぜか色んな人脈があって、自分のセンスと提案を持って大きな城に攻め込んでいくみたいな仕事のスタイルで、個人や小さな事務所が面白い仕事をするためにはこんなスタンスもあるんだってのはとても学びがありました。そうこうしてるうちに理事長やれって言われて、1代目は李さんが理事長だったんですけど、2代目理事長にさせられることになって、そのときに街歩きとか北浜テラスっていうのを始めようっていうことでNPOとして始めて、今につながってるってわけですね。まち案はNPOやOSAKA旅めがねで仲間とやってきましたけど、まずは旅クラブのNPOで年間5から6本、それぞれ1人が一つ責任監修でつくり自分で案内するみたいなやつからはじまってます。

創生研、北浜テラス、まち案内などやってたんですけど、実際の本業は全然仕事がなかったんですね。今までのクライアント、例えば高松だったら高松商工会議所がクライアントだったので独立しても引き継いでくれたんですけど、行政は一切引き継げないので、行政のクライアントはゼロだったんですね。あとは、今日も来られてますけど、岸田さん、篠原さん、梶木さんらの創生研の先輩の皆さんが、独立のお祝いの業務を作ってくださり、そんなことで食いつないでたっていう感じなんですけど。こんな元請けの契約が難しいのかっていうのは初めて知りました。行政の今まで環境整備センターでやった仕事を引き継ごうと思っても、直接無理なので、別の業務に入れこんでもらい下請けさせてもらうとかじゃないと契約できないんですね。こんな厳しいのかっていうのは再認識しましたけど。

なので、それから仕事がどんどん増えるってことはなかったんですね。時間がめちゃくちゃあったので、北浜テラスやOSAKA旅めがねの作戦会議は、仕事が終わってから夜10時ぐらいから打ち合わせをして2時ぐらいまで、相当な頻度でやってました。仕事じゃないんですけどね、それは。時間があったんですね。



OSAKA旅めがねっていうまち案内事業は、山根さん、小田切さんらをはじめ旅クラブも含め100人を超えるメンバーと水都大阪2009に合わせて立ちあげたのですが、小田切さんに今は引き継いでいますが、大阪でディープな20コースぐらい開発してこれで大阪の各エリアの方々とお知り合いになりました。

そうこうしてるうちに、これが本業の転機であるんですけど、水都大阪っていう府市経済界でス

タートしてるプロジェクトがあって、2009 年に最初のシンボルイベントがあって成功を収め、2010 年に一回失敗してるんですね。コンセプトが市民参加、継続継承だったのにイベント事業者に任せてしまい失敗の評価となり、2011 年には若いやつにやらせろっていう話になって、そこでたまたま選んでいただいたっていうのが転機になってます。水都大阪自体は相当面白くて、いろんなネットワークが広がり、いろんな勉強にもなったっていうことなんですけど、仕事としての契約という面においても、ちゃんと府市経済界と契約してるということに初めて位置づけられたというのが大きいです。いろいろな市民団体の人やボランティアの方とここで知り合うきっかけもあり、全然違うディレクターチームのメンバーとか、学識の嘉名さんや府市の人などにもお会いできました。

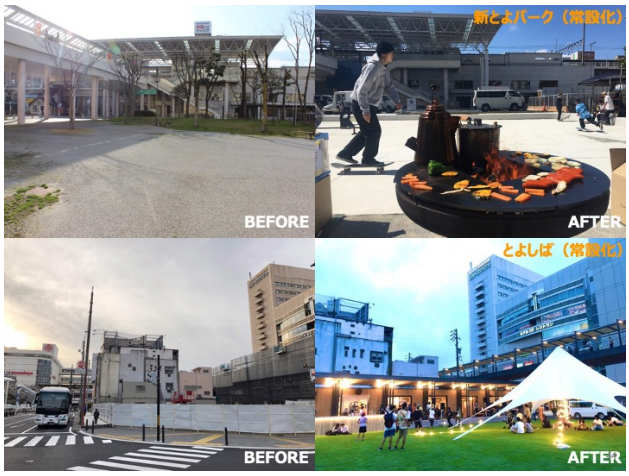
2013 年に、新しい民間の組織で水都大阪パートナーズというのを設置しようってことで公募が出て、これに応募して選定されたので 4 年間、水都でいろいろやってました。こんなメンバーで、官民連合ですね、完全に。民間もいろんな企業から出向していただき、商工会議所の中野さんも写ってますけど、そういう府市経済界のメンバーといろいろ取り組みました。こういう世界会議も、大阪でやろうって言ってくれるようになったっていう感じです。

●独立してからの仕事

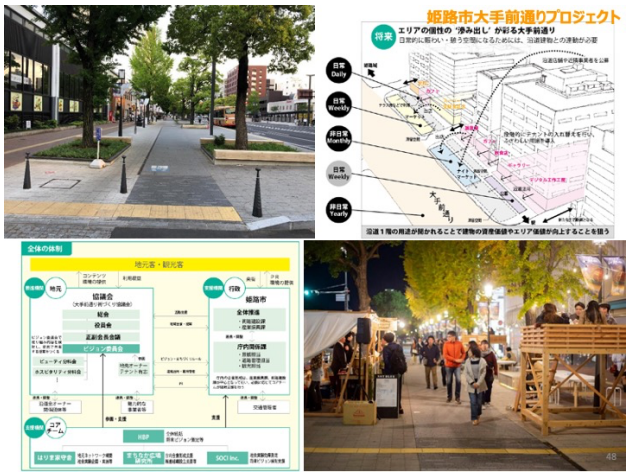
全然独立する前から、独立して仕事がないけど、時間は余ってたから、いろんなことやってたっていう、そういう感じです。ここはその後＜図＞、日本を代表する東大阪のモノづくりの操業環境をどういうふうに、都市計画を用いて保全していくかという取り組みです。

西梅田は、水音のエントランスっていう地下道の西梅田駅の目の前のところなんですけど、これも 4 年前か 5 年前の社会実験とビジョンづくりからはじまっています。地下道の管理協議会が長い期間地下道の維持管理を担ってきて、今後エリアの新たなイメージを打ち出し利用者にも使って欲しいという取組なのですが、ようやく今週、正式には昨日オープンして、こういう空間やお店がオープンしています。ぜひ、これも行ってみてください。地下街で、なかなかいい感じです。

豊田の駅周辺の車から人への再整備に呼応して、民間サイドのユニークなプレーヤや運営主体と「つかう」と「つくる」を一緒に進めようということを5～6年やっています。岡崎も乙川周辺のまちなかをどのように官民の投資を合わせていって面白い街にできるかをやってます。



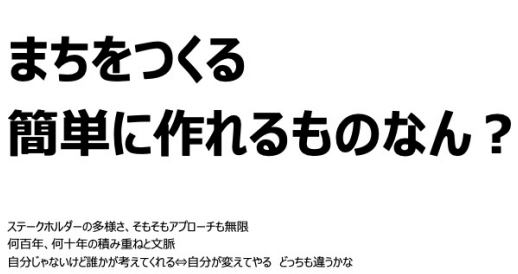
長門湯本温泉という山口県の温泉地の再生にも関わり、観光魅力と生活文化の質の両方を高める挑戦をしています。大東の北条エリアの市営住宅の建て替えでは、行政直営でなく民間の会社で行い、エリアのイメージを完全に刷新してしまおうというプロジェクトです。姫路の大手前通りではストリートの価値をつくりだす、ウォーカブル時業は歩きたくなる状況をもう少し広いエリアで実現するようなことを今やってます。



というのが、独立から今までの大体の流れなんですけど、ここからは、普段感じている違和感をお話しします。

●まちづくりで感じる　違和感

普段の違和感



最初は別の人にも言われたこともあるんですけど、街をつくる仕事ですというけど、そもそも街って簡単につくれんのかよっていう、おこがましいんじゃないか。まちはステークホルダーが多様で、アプローチも無限で、僕らが入るのは5年とか10年だけですけど、そもそも数百年とか数十年前から、ずっといろんな方達がつくりあげてきてるものなので、そんな簡単に変えられるもんではないし守るべきものもあると思うんです。最近、元気な人が多くて、俺が街を変えたるみたいな人も結構いるんですけど、それもちょっと違うんじゃねえか。また、多くの人はどうせ自分が動いても変わらないから誰かがやってくれるんだろうって考えてるんですけど、それもちょっと違うなと思うんです。両方違うよねと思っていて、そこの真ん中というか、5年、10年、街に関わっていくときの姿勢みたいのが問われるんじゃないかと思ってます。

これはよくあるライフワークバランスみたいな話で、僕はライフとワークは一緒なので、バランスという概念がないんですけど。そもそもバランスという言葉はなじまないんですけど、それも言い過ぎると、単なるパワハラになってしまうので。ここら辺は仕事の中で、どう楽しみを見つけるのか、普段の生活の中で、ひらめきがどう仕事につながるのかみたいな話かなと思います。それ

は仕事とプライベートとかいう前に、街で遊んでしまえば、多分一体になるんじゃないかなと思っています。街で遊んでいくと、仕事だろうが、プライベートだろうが、どっちもいい状態になる。あとは東大阪の工場街や長門の萩焼などに触れて感じましたが、職人さんとか手仕事とか、きっちり自ら作り出してるみたいなことですね。そういうのはすごい大切で、それは仕事、プライベート関係なくそういうのはやっていきたいんですけど、あんまりそういうのが大切にされない時代になってるっていうのも違和感の一つですね。

普段の違和感

課題解決、課題って？
本質的な問いがない

課題はこうなってほしい将来と現実とのギャップにより生まれる
今見えている問題は、本質的な課題でないかもしれない
その先にある面白い暮らし方を追求してはじめて課題が見えてくる
ワクワク感！

あとは課題解決って、よく最近いわれると思うんですが、人口減ってますとか、労働力少ない、高齢化っていうの、それは別に課題じゃないと思うんですよね。課題って、こうなってほしいってみんなが思ってる未来のイメージと現状のギャップなわけで、今見えてるのは状況ですね。状況であって課題じゃないんじゃないかなって、いつも思ってます。うちのメンバーではいつもこれを話してますけど、その先にある、面白い、こんな暮らし方をしたいっていうのがないと、課題も見つからないっていうことかなと思うので、ワクワク感が大切じゃないかっていうことですね。

あとはマネジメント、最近はやってると思います。エリアマネジメントとか、何かのマネジメント、はやってると思うんですけど、これも全然コンテンツのないどこかの街で、マネジメントとか組織論みたいなことが好きな人がたくさんいるんですけど、マネジメントとかDMOとかもそうだと思うんですけど、そもそもたくさんホテルがあって、ラスベガスに大人数で来るときに、どこに泊まったらいいかが、ホテル１棟では解決できないからDMOが調整する。エリマネも、いろんなステークホルダーや活動や事業があって、エリアの価値を高めたいとみんなが思っていて、それらをどう調整したらいいかっていう状況で初めて、マネジメントって必要になるわけで、そのコンテンツがないとこにマネジメントは要らないんじゃないか。まずはコンテンツとか活動を自由に増やしていくのが先ではないかが違和感ですね。

普段の違和感

専門パーツ分業化
一気通貫の仕事がない

海外でも同じ状況ということがわかった
全体のプロジェクト推進を見れる人がいない（行政か開発会社か）

これはなぜかこういう流れですが、専門パーツ分業化が非常に多い。われわれの業界でも、そうだと思います。なかなか一気通貫の仕事がなくて、このパーツだけお願いしますというのがほとんど。一部のパーツの専門家はいるんですけど、全体で地域を見たとき、何が問題でどの専門性を導入するのが良いかなどがすごい大切なとこなんですけど、なかなかそういう仕事がないのです。そういう専門家が育たないのは、大きな問題だと思ってます。これは海外に行っても似たような状況です。いろんなアーバンデザインの事務所と話していると、大体行政が全体を仕切っていて専門家はパーツを担当するんですけども、日本は行政が仕切ってるわけでもなく、専門家が仕切ってるわけでもない、縦割りで全体を見れる専門性が欠如している感じなのかなと。

あとは公平性悪平等。これは非常に面白いアイデアを持った人がいて、その人のアイデアをどうやったらみんなで応援できるか、いろんな許認可みたいな話もクリアしていくのかっていう話は、よく出ると思うんですよね、いろんなとこで。なんですけど、この人を認めたら、この人も認めなきゃいけなくなる、このエリアを認めたら、これ全部認めなきゃいけなくなるやんか、だからやめとこうっていうのが悪平等なんです。そういう発想が多過ぎて、なかなか次の面白いやつが出てきにくい、応援しにくいような世間になっている。そこら辺をちゃんと評価してあげるとか、どうやったら認めてあげるとかいう思想がないと、面白い人は一切入ってこなくて、地域の重鎮だけで決めてる、つまんないものになってしまうっていうのがあるので、そこら辺は非常に問題だと思ってるとこです。

これも皆さんと思ってることと一緒かもしれないですけど、契約方法とか、そのプロセスですね。これは日本は相当遅れてるんじゃないかと思いますけども、安かろう悪かろうの入札がほとんどで、何かそこにクオリティーを求めるという姿勢がないというのが多いと思います。そもそも仕様書みたいなものがあるんですけど、仕様書がいけてないというときに、仕様書に対しての提案をどうするのみたいな話もあるんですけど、仕様書を作るときから、いろんな知恵を得てやる方法がないと、結局優秀な人材は来なくて終わってしまう、これは皆さんいわれてることだと思います。

あとは狭い世界に入り過ぎてるんじゃないかな。SNS を検索したら自分の興味ある広告がすぐ出るみたいに、業界内もそれに似て自分の得意な殻に閉じこもっていないか、これは自分でいつも、そうじゃないようにしなきゃって考えてるんですけど。

普段の違和感

都市部が成立するとは？福島の実情

大都市のツケを福島に、高度成長を支えた
自分の故郷を奪われる、30年後の約束を待つ放射能廃棄物
循環型の大切さ

あとは、この前、東北に行ってきて、10 年たって、どういう状況かをいろいろ見てきて。震災の年、鳴海先生に現地に連れていっていただいて一周してきたんですけど、10 年たったこの前行ってきて、福島の街や原発のその後に衝撃を受けまして。帰宅困難区域が今でも、まだまだあるし、それが解除されてもほとんど人は戻ってきてないし、どんどん解体されてる。放射能廃棄物があるから壊していかないといけないみたいな感じで、結局自分の土地とか、生活の地を奪われてしまう。そもそも都市部が成立するために、周辺に発電所を置いているのが原因になのに、私も含めてその都市部の人たちが自分ごとになっていない。放射能廃棄物が、30 年間は原発の周辺に暫定で置いてるんですけど、それを 30 年以内に、日本のどっかに移しますっていう約束になっていますが、それが果たしてできるのか、相当厳しい状況なのでは。都市部の中に発電所を持つとか、循環の考え方が必要だなっていうのを相当強く思いました。

普段の違和感

ゼロリスク主義
運営維持管理の視点小

死んだらダメ、誰かに守ってほしい?

時代を経て語り継がれる津波避難などがパワーを持っている、維持管理できないハードを作ってしまう
コミュニティの信頼がないと行政の土木提案を受け入れるしかない、自分たちで対案を出せる日頃の地域力
管理者が訴えられる、自己責任が問われない、自分自身の首を絞めている

あとこれも、多くの防潮堤を見て感じたことです。大阪の川も一緒ですね。川も 1100㎜ の落下防止柵が必ずある。なぜか海外にはないんですけど、日本には必ずあるというのは、ゼロリスク主義。誰かが守ってあげないといけない、結局事故が起きると、管理者が裁判で負けちゃうっていうのが問題なんですけど、そういうゼロリスク主義でいくと、防潮堤はどでかくならざるを得ない、柵も高くならざるを得ない、そういうところがあって。これは将来、いろんな運営を維持管理、運営を考えていくときには、非常に障害になるところでもあって、コストがかかってくるとか、そもそも 100 年、200 年の津波のために作ってるんですけど、今の堤防がそのような期間持つわけがないので、それを誰がメンテナンスするのか、メンテナンスできなかったら、堤防の存在価値がすでにないんじゃないかっていうときに、それをどう考えんのかみたいな問題ですね。

普段の違和感

クライアントの先を見ない
解像度が低い

誰のために仕事をしているのか
本当にそんな適当でいいのか？自分の大切な人に同じことする？

ある程度、さっきの循環っていうのは、地域の循環のことだと思うんですけど、これはどちらかって、時間的な循環みたいなことを考えてやる必要があるんじゃないかなという気がします。違和感ばかりですいませんが、相当あるんですけど。

われわれの同じ業界の仕事でもそうだと思うんですけど、クライアントの先を見ない。クライアントが民間企業だったり、行政だったりすると思うんですけども、クライアントはもちろんそうなんだけど、クライアントの先にどういう人が喜んでもらったら、そのクライアントも喜んでくれるのか、そのゴールみたいなものを見ないケースが多い、非常に解像度が低い仕事が多過ぎるんじゃないかとか思ってます。そんな適当な仕事していいのかと。自分の大切な人に対して、同じアドバイスをするのか、同じ提案をするのかっていうのは、常に自分自身も考えなあかんなと思ってます。ここら辺を、解像度を高めて、誰に、個人にきちっと、その人のニーズとか思いに、どう応えていくのかみたいなことですね。そういうことにちゃんとせなあかんと思います。

こういう違和感を持ちつつ、僕はいつも仕事をしてるんです。

最近の二つの仕事をご紹介して、そもそもどんな仕事してるのかをご紹介したいと思います。

●長門湯本温泉街の再生のプロジェクト

まず長門湯本温泉街の再生のプロジェクトです。これは6年か7年前ぐらいにスタートしてるんですけど、山口県の長門市っていう所にある温泉街の再生のプロジェクトですけど、こんな11軒の旅館しかない小さな温泉街です。もともと40万人の宿泊者がいたのですが今は20万人になっていました。皆さんもしかしたら聞いたことがあるかもしれないですが、プーチンさんが日本で安倍さんと対談したときに泊まった大谷山荘があるところです。昔は川沿いに小さく温泉街ができて、団体客が来るようになりどんどん大きくなって、近年の旅行スタイルの変化に対応できず老舗旅館が廃業されたんですね。その旅館が、中心部に大きな敷地を３つ持っていてこのまま放置すると幽霊ビルが残ってしまい全体のイメージが悪化するということで、当時の大西市長が決断をして、土地を取得して公費解体したんですね。当時、こんな感じです。夜も真っ暗で、誰も外に出ずに、中のお風呂と中のカラオケ屋さん、食堂で食べて旅館から外には出ないというような状況だったんですね。

公費解体したんですけど、その後の使い方が実は決まってなくて。そこを、せっかくだったら一番の一流の星野さんに来てほしいっていうことで、市長が星野さんに口説きに行くんですね。星野さんはここは無理だと思われたらしいですけどあまりにも市長の熱意がすごく、この敷地を与えられてもできないけど、この温泉街全体をビジョンを持って市が進めていくのであれば投資しますと応えた。市長はそれを聞いて、ビジョンを誰がつくるのかが大切なので星野さんつくってくださいよってお願いするんですね。なかなか、すごい切り返しやなと思いますけど。星野リゾートにという投資をする人にエリアの将来ビジョンを任せるという、今まで聞いたことがない、すごいことをやるんですね。

地元の人から見たら、なんで外部の投資をするところに自分達の街を委ねるねんみたいにると思うんですけども、みんな危機感があったので進んだ感じですね。星野さんが提案されたビジョンが、ほぼその内容で市の計画になりました。内容は、全国トップ10を目指そう、タイプ3っていうそぞろ歩きして楽しい温泉地にしよう、将来このようなパースのような過ごし方ができたらいいんじゃないかなど、すごいリアルに書いて、これがすごいとこなんですけど。

この竹林の階段はともと雑木林の人の土地に勝手に階段を書いていたり、川の底に川床が書いていて通常は河川管理者が許すはずがないことだったり。従前従後の比較がこれです。星野リゾートの旅館、駐車場、ギャラリーなどが配置されています。また、もともと２つの共同浴場がありました。公設公営なんですけど、それを両方建て替えましょうとなってました。

この市の計画ができたときに、星野さんに声を掛けていただいて初めて現地を訪れることになり

ました。星野さんは今まで様々なプロジェクトをされているんですが、エリア全体でやるのが初めてということもあって、この計画を実際に進めていくには司令塔が必要と提案されていました。この計画には、誰がいつやるというのが一切書いてなかったんですね。ゾーニングや過ごし方のイメージはリアルに書いてあるんですけど。それらを具体的に事業や進め方に落とし込むところからスタートしたのですが、一番のポイントは、共同浴場です。今まで公設公営でやってきたんですけど、それが年間 6000 万円の赤字をずっと出し続けていたので、それをゼロにしないとあかんっていうことと、旅館は内湯にお客様を案内するため共同浴場は旅行客には使われていない、公設公営なのでメンテが行き届かず改修もできず、最近建て替えた方の共同浴場は綺礼になったけれど利用者が相当少ないなど、観光客にも地域にも使われていない、愛されていない状態でした、今回の温泉地の再生っていうのは、そこが一番の肝で、そこに魂を入れないと再生はしないし、６００年前にここからスタートしてる温泉街なので、ちゃんと愛のある民間が運営して収益を上げて地域に再投資するっていう仕組みをつくったほうがいいんじゃないかと提案しました。周辺のいろんな類似の事例を調べて、値段を変えれば民設民営でも成り立つはずだっていうことを導いて、民設民営に方針を変えましょう、また、ランドスケープや駐車場は行政がやりましょう、萩焼のギャラリーやのぼり窯については運営する主体がいないし事業になりにくいので先送りにして一定期間後使い方を考えようということでスタートしました。

推進体制も、これは時間がないので飛ばしますけど、ちゃんと責任を持って、専門家と地域の事業者と行政がプランを作ったり、地域の合意形成をしたり、事業者誘致をしたり、というのをデザイン会議でやりましょうと提案しました。ここにはハードデザインのランドスケープ、照明、建築、リノベーション、交通の専門家が参加してます。われわれは司令塔というところです。あとは民間事業者の共同浴場の事業主体、これは最終的にはプロポーザルで地元のチームが選ばれた人たちで、事業促進は地銀の山口銀行ですね。情報発信はとても大切で、地元のデザイナーの白石さんが最初から入っていて、そういうメンバーで実務的に作業をして方針を提案して、推進会議で年に 3 回か 4 回、この方針を決定し公開していくという進め方です。

実際は身近な小さいリノベーションからスタートしていて旅館の若手、萩焼の若手が事業主体になって。また、今までは旅館組合などでイベントはしていたんですけど、街のストックになっていくような事業をやる、まちの将来イメージに近づくことをやる、社会実験の中で将来出店して欲しい事業者の皆さんとネットワークをつくる、などに取り組みました。

川床は、相当ハードルが高いと思ってたんですけど、山口県の河川管理者が非常に頑張ってくれました。社会実験で１カ月で撤去するんですけども、最初から常設で持つような流量計算、構造計算をして、鉄骨で組み下の岩盤に打ち付けて、増水しても流れないこと、警報が出たら地元で責任を持って危険回避、安全管理ができるか、日常の清掃ができるかなど、それらを確かめる社会実験を１カ月しました。

道路についても半分程度は将来人に開放したいという話もあったので、当初から道路空間を使ったり道を狭くして相互通行できないようにして速度が落ちて問題も起こらないかなどを確かめたり。

夜間景観については、仮設でいろんな所に期間限定で照らしてみて、地元の人がどういうところを照らしてほしいか、大切に思っているか、こういう照らし方がいいよねとか、をみんなで体験して全戸アンケートして、最終的なデザインに反映していくことをやってました。

社会実験は、先ほどのリバーカフェや北浜テラスと一緒なんですけど、ペーパーで見ても分かりづらいので、実感してこういうことだったらいいねとか、未来に向いていけるよねとか、実際ここはこうだって、なかなかペーパーでは言えないけど、体験したらここはもう少しこうしたほうがいいんじゃない？みたいな意見も出やすくなるので、非常にいい効果があったと思います。共同浴場の恩湯の建て替えについては、この４人が長門湯守っていう共同浴場を守っていく会社をつくりました。こちらの２人が旅館の息子たちで、手前の女性が飲食店の経営者、奥が白石さんというデザイナーの４人で、真ん中は岡さんという設計者で、仏生山温泉っていう高松の温泉を自分で設計して運営もしている人です。

そこで特にこの２人の決断が大きかったですね。２人は社長のお父さんがいて、旅館を造り成功させてきた人達で、こういう本業とは違う事業に労力を割くことや、赤字が出た時にはその負債が本業に来るリスクがあるので、それはあかんぞと言われてたんですよね。でも、彼らは温泉街再生にとって自分達がしないと、という想いがあって、僕らも事業計画一緒に作って銀行交渉も一緒にやって、最後はプロジェクトファイナンスを山口銀行が実現してくれることになり、民設民営の事業がやっと成り立つことになりました。

恩湯は特徴があって、岩から直接湧いて出てきてるんですよ。普通の温線はボーリングして出てきますが、岩から出てるのと、浴槽の下からも水が湧いていて、２カ所から直接湧いています。いつも大谷さんが言ってるのは、一切空気に触れずに生の温泉が浴槽に入っているのは非常に珍しく、それも自噴してるのも珍しいみたいで、全国の自然温泉マニアがすごい来てるので皆さんよかったらぜひ入ってください。なかなかいい湯です。

ランドスケープデザインは、金光さんっていう方が全体をデザインしています。面白いのは、金光さんは星野リゾートのマスタープランの提案や界のランドスケープも担当しているんですね。だから、同じ人が星野も市が発注するエリア全体のランドスケープも一緒にやってるので、全体のクオリティが担保しやすい。

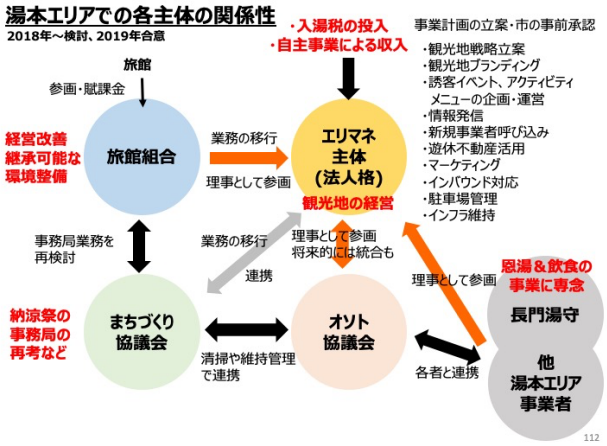
夜間景観は長町さんが全体をされていて、グラフィックや情報発信は白石さん。道路や河川の使いこなしは、大阪やこれまででいろいろ学んだことを活かして、地元主体で運営できる手法を使ってます。

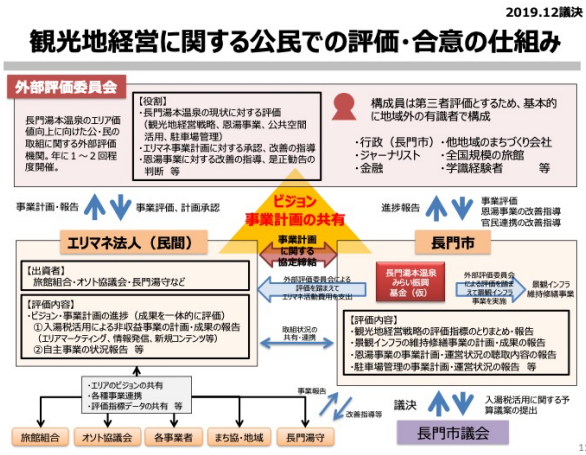
交通は片岸さんがやっていますが、３年間かけて相当な実践と協議を経てそぞろ歩きが楽しめる交通に変えていってます。最初の年は一方通行か相互通行かを両方２週間ずつ試したり、２年目は狭窄部を導入して、わざと車をすれ違えないようにして、そこで生まれた空間を人の空間で使おうと試したり、３年目はどんなベンチ等を設置するのか検証したり、これらは相当ハードな警察協議だったんですけど、実現することになりました。

景観ガイドラインは益尾さんや川原さんらが頑張って実現させました。小さなリノベーションは木村ダイゴさんをはじめチーム総出で押しかけ提案をしましたね。誰でも出店してほしいわけではなくて、相当厳選してその人と一緒にどうリノベしようかを考えてます。設計チーム、夜間照明チームがバックアップして、家屋を図面に起こしたり最低限のリノベ費用を出したり、大家さんに交渉するのは市役所の松岡さんが、ここら辺の大家さんと友達になっていて一軒一軒話していくなど、そういうことがあって進んでるっていう感じですね。

これは恩湯の建替と星野さんの界＜図＞です。これがランドスケープで階段ができました。これらが完成した途端にコロナになったんですね、実は。コロナになって、非常に厳しい状況になったんですけど、ちょうどエリマネ会社が立ち上がっていたこともあって、全体でいろんな感染防止策に取り組み、そぞろ歩きで外を歩こうって打ち出していなどの結果、今まで団体のお客様が多く来てたんですけど、団体から個人に、遠くからマイクロツーリズムの流れに変わっていって、実は温泉街全体のレブパー（単価）は下がってない、逆に上がってるんですよね。今考えると悪いことだけでもなかったんじゃないかなという感じです。

ここでランドスケープのハードや、小さなリノベーション、核となる恩湯の民設民営の建て替え、星野リゾートの界、公共空間の活用などはおおよそできてきたんですけど、これからどういう観光地としての運営をすんねん、っていうのが決まってなかったんですね、全然。それを、今ある旅館組合とか、湯本まちづくり協議会という自治会を中心とする集まりとか、オソト活用協議会ってのは、さっきの公共空間を占用、運営しているところですね。長門湯守は共同浴場の建て替えと運営ですね。そういう主体はあるんですが、観光地全体の運営やビジョンづくり、対外的に価値を発信したり、新しい事業者を呼び込んだり、不動産を活用していく主体が全然いなかったんですね。旅館組合にそれをお願いするのは難しい状況だったので、新しい主体が要るなという認識で、これは 2～3 年目ぐらいから取り組みました。





いろんな動きと並行して検討していて、最終的には人と財源が問題になるなと思っていたので、財源は入湯税を使えないかと。今、全国で大体 150 円なんですけど、最終的には 300 円にして 150 円分のかさ上げ分は、通常市が集めて福祉などの一般財源に回されるのですが、基金をつくっ

て全てかさ上げ分は基金に入れて、基金から湯本エリアに再投資する仕組みを梅川さんなど先輩方に教えていただきながら皆で作りました。年間20万人泊まって、大体3000万ぐらいですね。年間3000万円のうち、毎年の人件費や広報などの活動費、あとは景観インフラという照明や道路のグレードアップ部分の補修費の積立分です。これらは、市の中の財政メンバーやプロジェクト担当の成長戦略の人たちが頑張って実限しました。

あと心配だったのは、最初は熱意のある人達でうまく進むのですが、数年経ったときに担当者が変わる、市長が変わる、地域の関係者も変わるなどの人事や政治リスクを最小限にしたい、ビジョンを官民で継続的に共有したい、そのための枠組です。市に任せるのではなくて外部評価委員会っていう外部の方に入っていただいて、そこがちゃんと市とエリマネ法人の両方を見ていく。だから、市の諮問機関じゃないってことですね、ポイントは。メインの目的は入湯税の再投資の財源を、どういうことに使うかをここでちゃんと議論をして、KPIに沿っているかも含め評価していただくこと。このような素晴らしいメンバーの方にお願いして、梅川さんは今、国学院大学の先生ですけど、もともとJTBF（日本交通公社）で一番日本で温泉地再生に詳しいんじゃないかっていう人です。ディスカバージャパンの高橋さん、熊大の田中智之さん、中尾さんは八十二銀行、旅ジャーナリストののかたさん、ロフトワークの林さん、星野社長にも参画いただいて、会を年間2回ぐらいやってきてます。まち会社が設立され、マネジャーも決まって、今まさに運営して2年ぐらいたってるのが、長門湯本温泉です。

我々は何をしたかというと、何でも屋みたいな感じになってまして、いろんなことやってます。全体の推進体制の提案、公設公営から民設民営の転換とセットで恩湯の事業計画や銀行との交渉、土木デザイン・交通・利活用などの調整、エリマネ主体や財源・基金のスキームや外部評価委員会、公共空間活用アイディアの検討と、利活用の主体とスキームの構築、社会実験の検証項目の設定と実施支援、など、いろいろです。

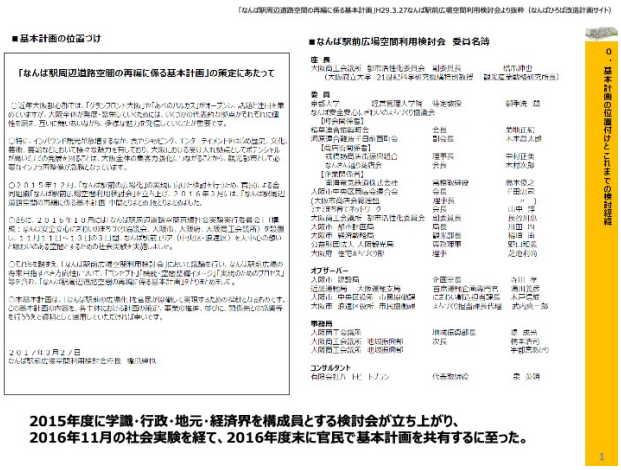
●なんば駅周辺の道路空間再編プロジェクト

もうひとつの事例が、この前、社会実験をしていたなんば駅周辺の道路空間再編のプロジェクトです。なんばは、10年前から関わっているんですけど、もともとこのように車とタクシーで占領されている状況でした。もともと2008年、なんさん通り商店会がホコ天にしたいと発案してから、2011年に自治会と商店街と企業の27団体で協議会が設立され、その時から私はお手伝いをしています。当初は大阪市は広場整備が終わってるので関われないということで、民間サイドで将来ビジョンを勝手につくって地元合意して、それを大阪市に提案したんですけどまだ関われないとのことだったので、大阪商工会議所の協力を得て経済界からも提言をいただき、2015年には市・府も参画する検討組織ができて、官民でビジョンが共有できたので、2016年に初めて社会実験に至りました。

その後いろいろあって5年間もかかってるんですが、プランをさらなる歩行者優先のものに改良して、2020年に交通・荷さばきの大きな方針が決まり、2021年11月の23日から12月の2日まで2回目の社会実験ができることとなり、その検

証を持ってプランを確定をさせて来年から工事スタートという状況です。

昔、昭和７年オープンの高島屋と広場です。前の広場はこういう感じですね。全部車ですけどモータリゼーションに対応した使い方になっています。今はタクシープールができてこうですね。最初は構成員みんなでウリや課題を話しつつ、プレス調査をしてみたら、たばこ吸ってるか待ち合わせか、ティッシュ配りかって、３つしかないことに愕然としました。大阪一番の繁華街の玄関がこれでいいのかっていうことですね。地域の中で将来ビジョンを合意形成をしていったんですね。こんなのつくったら、普通は車通れなかったら不便やんかって、反対となるんですけど、さすがにここら辺の人たちがすごいなと思うのは、ほぼ賛成で大反対っていう人はいなくて、逆にこういうのを進めていこうと言っていただける方のほうが全然多かったですね。これが 2015 年にスタートした検討会のメンバー＜図＞で、地元、行政、経済界が入ってます。


「なんば駅周辺道路空間の再編に係る基本計画」H29.3.27なんば駅前広場空間利用検討会より抜粋（なんばひろば改造計画サイト）

■基本計画の位置づけ

「なんば駅周辺道路空間の再編に係る基本計画」の策定にあたって

■なんば駅前広場空間利用検討会　委員名簿

0．基本計画の位置付けとこれまでの検討経緯

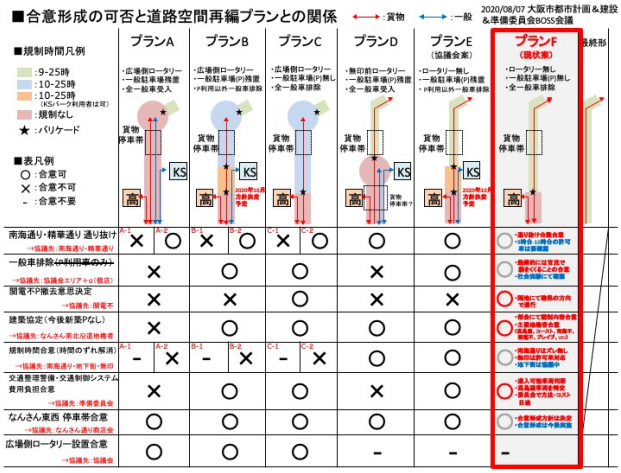
2015年度に学識・行政・地元・経済界を構成員とする検討会が立ち上がり、
2016年11月の社会実験を経て、2016年度末に官民で基本計画を共有するに至った。

これは 2016 年の社会実験です。このときには、一方通行は残ってたんですけど、3 日間の社会実験でした。社会実験では相当いろんな使い方をして、マーケット、音楽等イベント、企業 PR などもやったんですけど、結局ゆっくり過ごしたいという回答が一番多くて、上質な滞留空間をつくるのが一番大切やなと皆で再認識して。イベント空間じゃなくて、ですね。周辺の交通が持ったから、結構いけるんじゃないかという明るい希望があって、結構細かい検討もして占用物や利活用のイメージまで皆で検討してました。

しかし、これが 2019 年 2 月から 3 月に激震が走りまして、警察協議で今のプランがあかんという話になったんです。一方通行はいけれども、広場やなんさん通りの乱横断が危険なので全部防護柵で分離してくださいとのこと。なんさん通りは今よりも分断されるやんかと地域の人は全く納得できなかったんです。協議の中でそれ以外に２案出てきました。ひとつが U ターン案。途中に一般駐車場があるので、南から入り広場の手前で U ターンさせれば広場には車を入れずに済む。しかし、ここは一番人の通行量が多い場所で、ここにロータリーと防護柵が現れる、こんなありうるかってなった。

もうひとつは全区間ホコ天にしましょうという案です。高島屋、無印良品、地下街などの貨物を全て許可車両として、安全確保のため全ての車に警備員が前で誘導してくださいという案です。どれも現実的でないという話になって、皆が相当モチベーションダウンして、このプロジェクトはポシャるのでは？と真剣に思った時期です。どうしようかって皆で話して、自分たちでどのような交通や荷さばきの方法があるかを提案するしかない、でもデータがない、データを自分たちでとりにいこうという話になって。みんなで手分けして、こういう地味な調査を重ねてそれをベースに

仮説を立てました。僕らが目指しているＥやＦになるには、何をクリアしたら良いかを明確にして、一つ一つつぶしていこうということを考えたんです。これは大阪市の担当者と密に意見交換しながら仮説を作り込んでいきました。



大きなハードルだったのは、KS パーキングという無印良品にある一般車が入る駐車場、お客さんのための駐車場です。それがあると貨物車に限定できず一般車を入れなきゃいけないので、少なくともロータリーは免れません。KS パーキングがなくなれば大きく変わるね、そこで附置義務駐車場を別の場所に飛ばす協議を進めました。

また、荷捌きの貨物車両の停車スペースのシミュレーションも大きなポイントでした。途中出てきた停車スペースの配置についての大阪市案が、なかなか地元が合意できるものではなく、自分たちでシミュレーションをやり、その台数をどこで確保するか、ピーク時間に何台あったら足りるのかなどを算出し、大阪市の試算の 13 台から 6 台で大丈夫、新たな停車位置から従来の位置と比較しても大きく離れないなどを導き出したんですね。この結果、大阪市と協議をしてようやくこれが警察協議の俎上にのるのが 2020 年、1 年ちょっと前ぐらいです。

ようやく交通と荷捌きの方針が決まってきたので、地元もよしいくぜっていう感じになってきたんですけど、ずっとコロナだったので社会実験ができなかったんですね、今のうちに大規模商業施設や裏なんばの個々のお店など、これまでは昼間近くに停めていたのが停められなくなるんで、一軒一軒、全部合意形成していこうとなり、一軒一軒、土地と建物を全部登記簿上げて、土地建物オーナーと 1 階テナントの人、周辺の自治会の人で 120 軒ぐらいあるんですけど、これを全てしらみつぶしに話をしに行くことをやりました。これは行政がしたら逆に反対意見が爆発しちゃうんですけど、地元の商店街や自治会の役員さんが普段から付き合いのある地域の人に良い街にしていこうと説得しているので、納得いただけるんですね。これは地元の皆さんがすごいです。

最初は広場部分だけかと考えていたら、なんさん通り、御堂筋、パークス通り、蔵前通りなどにも波及しています。また、荷捌きの貨物車両の通行証のルールを作って、高島屋さん無印さん地下街さんなどと連動して、その他の荷さばきの運転手さんに情報を伝えて協力を求めるような地味なことをやりつつ、この社会実験を進めました。

社会実験では、広場的になってて、今回は飲食もイベントも一切何もなかったんですけど、今回はそこが目的ではなく、周辺の交通や荷捌きが適切に回るかが目的だったんですね。これが 16 の検証項目で、周辺で交通機能、タクシー、バス、身障者、荷さばきがちゃんと運用できているか、溢れていないか、停まっている時間は適正か、周辺の交差点交通がパンクしてないか、押しチャリが

できているか、歩行者と自転車と車の交錯はなくて安全か、検証項目にしています。

当日は何もなくてベンチとテーブルを置いてるだけなんですけど、これが結構座っていて、ベンチは 100 脚用意してたんですけど、10 日のうち最初の 5 日は深夜は片付けるんですけど、最後の 5 日はそのまま残置したんですね。なんと一つもいたずらされずに一つも盗まれなかったんです。ミナミ、すごいなと。夜はカップルが結構多かった。夜の 10 時ぐらいになると女子率が高くなるんですね、安心感がある。

ミナミにすでにある歩行者モールネットワークがあるんですけど、なんば広場となんさん通りが歩行者空間になることで、分断されていたのがつながって回遊性を高めていきましょうということをやっています。これも何屋か分からないようなことをやってるんですけど、ここに書いている感じですね。ニューヨークに 2012 年行ったときにすごい近い感じだったなと思って。これタイムズスクエアですけどなんばも負けてねないよねって思いMいう感じですね。世界が競って自分の街の一番のところを歩行者に開放してますね。

●ハートビートプランのこれから

自分たちが取り組んでいることが国内外でどのぐらいのポジショニングや時代の流れの中にあるのかを体感しておきたくて、また海外の人たちがどういうスタンスで仕事してるのかも知っておきたいので、視察旅行を所員みんなで行っています。ニューヨーク、サンアントニオ、ロンドン、シンガポール、ルール、パリ、ベルリン、ハンブルグ、コペンハーゲン、メルボルンなど、刺激になります。

時代が変わった

人口減少カーブ
ニーズ・嗜好の多様化

×従来同様のコスト負担は困難
×同一大量供給の方法の限界

ここからは、時代が変わったっていう実感があり、僕らの仕事のスタイルも変えなきゃいけないなって思ってる話です。今までに体験したことがない人口減少の状況にあるっていうのと、ニーズや趣向もめっちゃ多様化してて、昔みたいに大量で同じモノやサービスをちゃんと提供してれば何とかなってた時代じゃないのと、従来のコスト負担はもはやできなくなってる時代じゃないかと。もうひとつは、コロナを経験して、気候変動や環境の話も実感してきて、個人がやりたいことを自由にやるのは人権で保証されていると思うんですが、それを皆がすると結局地球温暖化が進んでし

まう、コロナが広がってしまう。全体としての最適と個人の自由のバランスが相当求められていて、今後そういうのが必要だとみんなにインプットされたんじゃないかと思います。

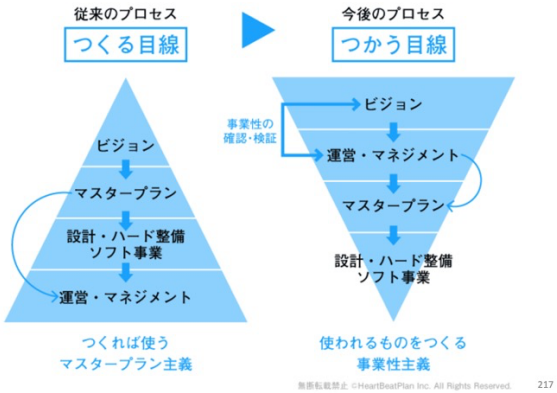
これは福島の話でも思いましたが、観光もそうですよね。今回、星野さんが言われているマイクロツーリズムが見直されて、長門湯本温泉も今までは瀬戸内海側から日本海のほうに山口県の人は来なくて九州や広島に行っていたんですけど今回は相当来ていた。エネルギーも、外に頼ったり資金を放出するのではなく分散して地域内で循環しようというのが当たり前になってくる時代かなと思います。

こんな時代の暮らし・自治

個々の妄想・エンジン
全体最適
今まではこの２つが大きくずれてなかった
これからは大きな理念・取捨選択が必須
これをどう融合させるか！

個人の妄想やエンジンと全体最適をどう融合させるか。今までは個人の妄想やエンジンを突き詰めても全体最適と方向は大きく変わらなかったんじゃないかと思うんです。これからはこれらの行き来が重要じゃないかと思ってまして、強力なリーダーシップでこの方向でいくぜ、みんな我慢しろとかいうのでは無理で、大きな方針を示すんだけども、ボトムアップで寄り添ったり、これは失敗したとなったら寄り戻したりとか、この行き来っていうのが必要で、そのどちらかの片道のスタンスではたどり着けないものがあるんじゃないか。これは最近読んだ、『進化思考』って本なんですけど、その本で書いてる、生物の進化思考っていうのがあって、変異と適応を行き来して、生物は進化してるっていうことなんです。左側は、常套手段の市場分析をして実行を評価していく方法なんですけど、これからは右のやり方じゃないかなと思ってます。個人の妄想とか共感を先行させて、そこで市場をつくり将来予測をしつつ、共感を得ていくやり取りの中で何を実行したらいいか決めていく。変異って、今までにないような新しい価値を急に生むとか、妄想やアイデアのイメージ。適応は、データをとったり社会にうまく慣らしていく感じです。一番下は個人の遊びや好奇心なんですけど、それを行き来してるうちに社会の価値に昇華していくプランニングプロセスになるんじゃないかな、それがたまたま進化思考と似てますね。

新たなプロセス「つかう」目線で



これはいつもお話ししてる内容ですけど、つくるからスタートするんじゃなくて、使う人や使うニーズからつくるを決めることですね。今までの都市計画やプランニングはどっちかっていうと左側ですね。ビジョンやマスタープランがあって、運営は当初あまり考えられていない。逆転の発想で使う人がどのような運営ができるかの重要性を確認した上で、詳細なプランニングに落とし込んでいくような、今までの OS とは違う OS の民主化が要るんじゃないかっていうことを常に考えています。

こんな時代に対応するためには、

プランニングの民主化

OSを変えないと！

主役は自分とか個人で、行政や先生や専門家が提案して、それに対して住民ワークショップなどで住民の意見聞きますっていうことではなくて、自分たちで仲間を集めてどう地域の動きをつくっていくのかの方法、プロセスを開発していく必要があるんじゃないかなと思ってます。でも個人の妄想からはじめると個人の趣味ですよねって終わってしまうので、そうじゃなくて、個人の妄想なんだけども、全体のビジョンとどう融合していくか、個人の妄想が全体のビジョンの中でどう位置付けられているのかをちゃんと見せていければ、融合も十分可能なことだと思うんで、それもプロセスの開発の一つかなと思ってます。

普段の生活では当たり前のように、民主化されたOSをみんな使っていると思うんですよね。金融機関からクラファン、旅行会社からAIRBNB、交通事業者からUBER、商業店舗からメルカリなど、それぞれの個人がこのような技術やシステムを使うことで、生活の民主化をやってるんですね。だから、街でもできないはずがないし、ここに書いている４つなどはプランニングの民主化をするときに大切と思っていることです。個人の妄想からスタートして公共に位置付けていくとか、使うからつくる。フロートビジョンっていうのはあえて位置づけずに浮かしておくのがよいというやり方、計画の技術はもちろん必須ですが誠意ある合意形成技術も大切かなと思ってます。

●大切にしたいこと

プランナーにとって大切だと思うこと

業務じゃない、運動だ！アクティビスト＆戦略家

50人ヒアリングの意味、事業者や市民の想いがそもそものスタート
一方で自ら街に飛び込みプレーヤーになるという楽しみ方もある、当事者の不安や事業主としても覚悟や人やお金の巻き込み方を実感できる、当事者の立場を共感するために役立つ
単なるアドバイスだけのコンサルはいらない

あとは、これは大切だと思う。僕らはやっていることは業務じゃなくて運動だと思ってます。運動ですね。まさになんばのプロジェクトは運動です。何年も無視されても粘り強く続けて民間の有志メンバーが行政や地域を巻き込んでいる運動です。水都大阪も運動ですね。あれは府市経済界の人、素晴らしい、あの仕組みをつくってくれた人も、実際に聞いてると、運動ですね。最初にユウスケさんとか、伴さんらがされていたことも完全に運動です、一番最初に水都が始まったときにそういう運動家が民間のトップをやっていたから水都はうまくいったと思います。その人たちは全部、イケていて違法スレスレなことやってましたね。僕らは、そういう人たちに教わって、ギリギリだけど面白いことは何か、どうやって認めてもらうのか、ぎりぎりアウトじゃなくてぎりぎりセーフとは何なのか、そういうのを教わりました。

そういうことを攻めていくのと、単なるアドバイスだけのコンサルは要らないと思ってるので、自分自身がちゃんと動くアクティビストになり、しかもそれは動くだけじゃなくて、ちゃんと戦略家にもなれる、両方になれるようにしておくというのがすごい大切かなと。自分たちもアクティビストっていうか、何かを事業としてやっておきたいと思っていて、シェアハウスを長門湯本で始めていたり、隣では社員の有賀さんが家族で移住し

て醸造をしているサンロクロクビールなど、自分たちも事業をやってみてます。

シェアハウス「みかん荘」

あとは、問いを立てるっていうのが、すごい大切で、課題はそんな簡単には見えるものではなく、求める将来と現状のギャップが課題だと思うんです。それも一つの問いだと思いますし、何をしたらゴールになるのかとか、地元の人は潜在的に何を求めているのか、何を問いにしたらいいのかっていうのが、すごい大切だと思います。正しい問いが立っていれば、半分は成功と思ってるんですが、ここで間違えると全然違う解決策になっていくんですよ。ここは非常に大切で、問いを立てるってことは、僕らが専門家の立場で入る場合は、自分がこれをやりたいとかいうんじゃなくて、相手の人が何を望んでいるかとか、こうなったらいいんじゃないかっていうのを汲み取ることが不可決なので、僕たちはニュートラルにしておく必要があるんですね。当初はニュートラルで接するけれども、地元の人達の思いを聞いた後にはちゃんと方向性を提案する、そういうのが要るんじゃないかなと思ってます。

あとはストリート主義、オルタナティブ追求。これはにじみ出しで、ストリートからいろんな面白いものが始まるんで、そういうものを大切にしたい。また現状とか通常のセオリーどおりじゃない、常にオルタナティブの可能性を問い続けたいなと思ってます。

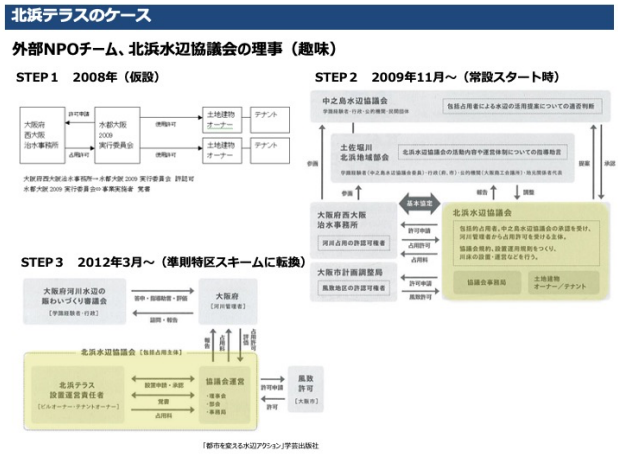
これは業務だけの話ではなくて、何かをするときにはチームの中もチームの外との人達ともそうなんですけど、いかに心を開ける関係になってるか、仕事でうまくいかないときには大体相手が自分に対して本音を言ってくれてない、情報も全部くれてない状況。それをできてないのは、こちらにも心を開くコミュニケーション能力がないとか、何かが足りないんです、実は見えないんですけどこれすごい大切なとこかなと。

これは常に気に付けてますが、ガチビジネスで、これはお友達ビジネスの対語なのですが、お友達ビジネスはお店始めたので友達たくさん来てね、俺もあんたの買うからあんたもこれ買ってよのような商売のことで、それ自体は悪くないのですが雇用を生まないし、街に再投資するまでいかないものが多い。ガチな事業は持続エンジンとして必要でちゃんと盛り込まなきゃいけない。

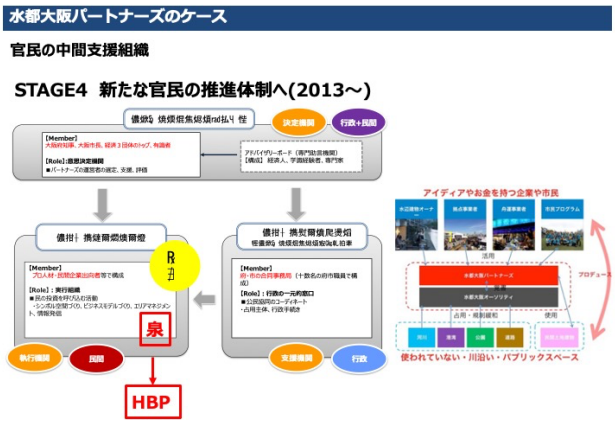
これはまち医者の話ですね。ジェネラリストで、一気通貫でやる必要がある。これは世界でいろいろな事務所に話を聞いても実はあんまりない仕事のスタイルだなと再認識してますし、専門性でどんどん細分化しても、なかなか実現できないことを、きちっと提案できるようにしとかなきゃいけないってのは大切かなと。

●ＨＢＰと泉の立ち位置

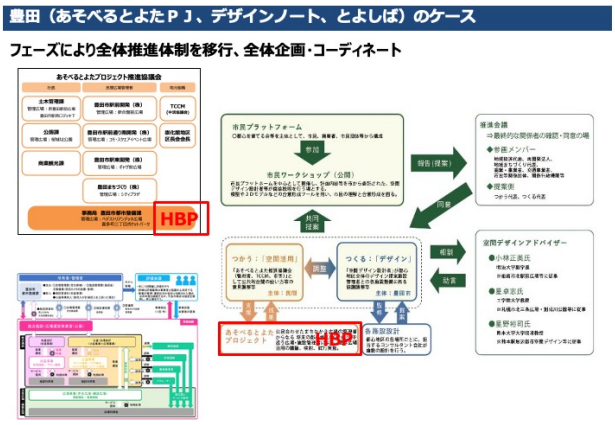
ここからは、私や HBP がプロジェクトの中でどのような立ち位置で何をしているかをご紹介したいと思います。



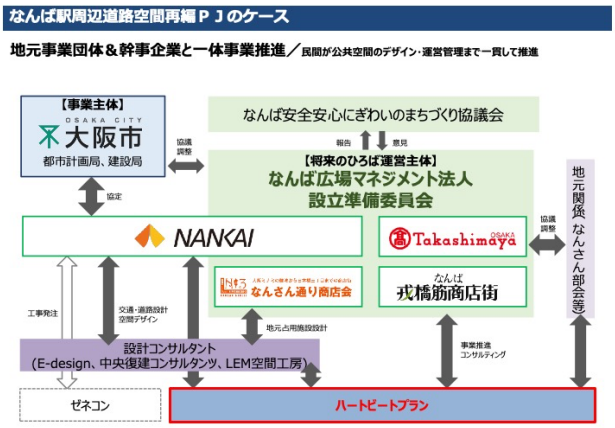
これは仕事じゃないんですけど、北浜テラスは運営主体の北浜水辺協議会の役員として参加してます。



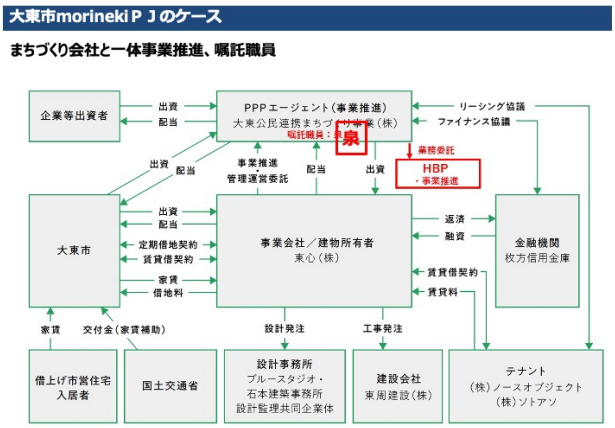
水都大阪では、「水都大阪パートナーズ」という府市経済界の推進会議の下にある民間団体の理事になり、高梨さん忽那さんと一緒に、ハートビートも一緒に仕事してます。



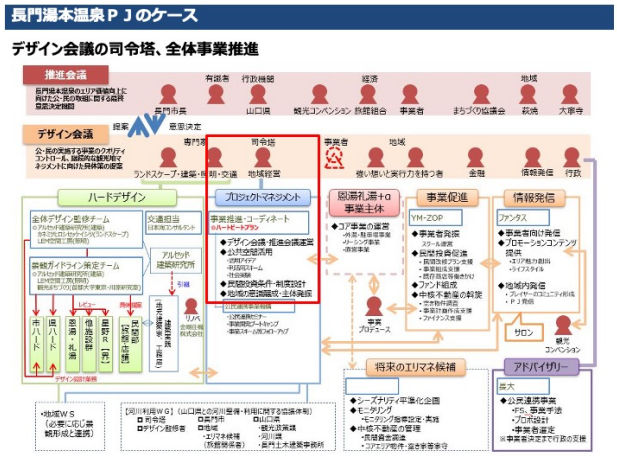
豊田では、「あそべるとよた」という使う側のチームに入り、ハードチームやとアドバイザー、推進会議と連動しています。



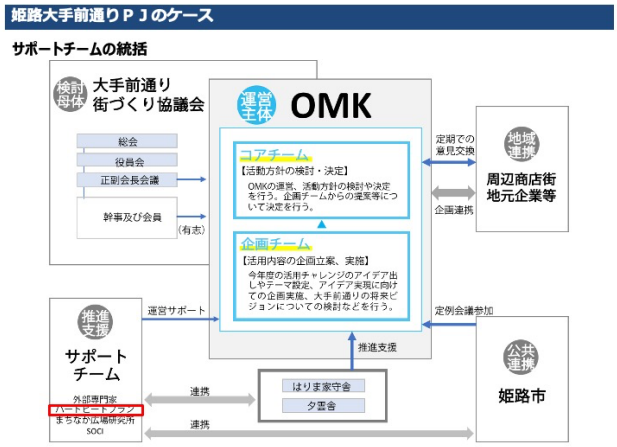
なんばは、南海電鉄、将来エリマネ法人になる4社の準備会、地元の27団体の協議会がクライアントで、全体の事業推進や、今は大阪市が進める公共事業のハードチーム交通チームなどと連動して進めています。



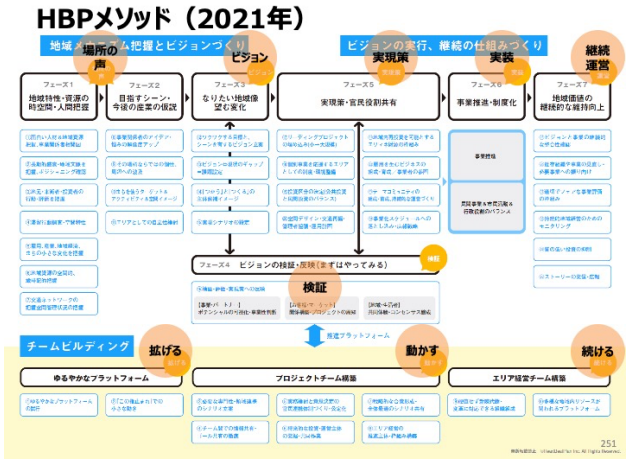
大東の「morineki プロジェクト」は、入江さんが社長のまち会社に嘱託職員として僕が入り、ハートビートはそこと一緒に仕事をしてます。



長門湯本温泉では、デザイン会議の司令塔です。



姫路では、地元の主体がありつつ推進支援チームに入ってます。このように全体の事業推進を担っていることが多いです。



先程のプランニングの民主化を体系化しようとしたのがこのメソッドです。これは社内でもいろいろ議論をして、これはサイトに貼り付けてますんでご覧ください＜図＞。プロジェクトや地域の状況のフェーズごとに何をしておいたらいいか。民主化を目指しているので、僕らだけじゃなくて、いろんな人が自らやろうと思ったときに、こういう方法で進めたら大きくずれることはないんじゃないか、別に唯一の正解じゃないと思うんですけど。ビジョンと実現策の間に、ちゃんと検証もあり、チームビルディングも、最初の段階と、動かす段階と、続ける段階では違ってくると思います。これは 10 年前にもつくってたんですけど、それをバージョンアップして、自分たちの頭の整理も含めて更新しました。

●ＨＢＰ・プランナーはこうありたい

HBPの存在意義

動く公共財になる

経営の民主化
いい器をつくる

動く公共財になるって書いてますけど、公共財っていろんな街の人達が普段の生活をするために必要なインフラだと思うんですけど、僕らは、自分たちも動くんですけど、そういうインフラになりたいなって。そういうインフラになるために、街に関わるプランニングの民主化のツールみたいなのを広めていきたいなと思ってます。また、経営の民主化でいい器をつくるっていうのは、ハートビートのそのものの会社の経営を、結構今でもしてるんですけど民主化して、若い人たちにちゃんと参画してほしいと思ってます。クオリティーが高い仕事して給料も高い器をつくっておいた

ら、若いメンバーのまた次の世代が入ってこれるし、プランニングの民主化を広めていくためにはこういうベーシックな組織が要るのかなと考えてます。

プランナーという仕事

なぜまちに関わるのか？

めんどくさい、困難が待っているのに、何もしなければ反対や苦情ややっかみも受けないのに
こんな時間とお金と情熱を使うんだろう？

⇒永遠の問い
そのきっかけをつくれて関わってよかったと思ってもらえるセンスと技術と情熱を持ったチームでありたい

最後に、なぜ街に人は関わるのか。いろんな人が全国にいると思います。僕らに声をかけてくれる人たちも、こういう人たちなんですけど、街に関わるということはご存じのとおり、めんどくさい、いろんな調整が必要、いろんな反対や苦情ややっかみが発生します。街に関わらずプライベートでもそこそこ快適に暮らせるのにと思うけど、なぜかみんな街に関わる。全員じゃないですけど、関わる人がいますよね。なんで、こんな時間、お金、パワーを使うんだろって、僕はいつも思います。僕もある程度は使ってますが、それ以上に使ってる人もたくさんいますよね。それは、僕らにとっては答えは今ないんですよ、これは永遠の問いなんです。ただ、街に関わってよかったとか、こんなきっかけができた、こんなプランニングのやり方があったなど、そのような人達とちゃんとご一緒できるようなセンス、技術があって、情熱もあるチームでありたい。プランナーは、そういう人であってほしいし、僕たちはそういうチームでありたいなと思ってます。

好きだと思える
まちがある。

わたしの「やりたい」が
だれかの「楽しい」になるまちへ

Heart Beat Plan

わたしたちハートビートプラン（Heart Beat Plan）は、大阪を拠点とする都市デザイン事務所です。ワクワクする状況を生み出すことをミッションに掲げ、そこに生きる人たちと併走しながら、まちの血流を良くするように人・もの・ことの関係性を編み直します。

ハートビートプランでは、この度サイトを見直ししたのですが、それに先だって１年ぐらいメンバー全員で僕たちはどういう世界を目指すのかっていうのを考えたんです。「好きだと思えるまちがある」っていうのと、「わたしの「やりたい」がだれかの「楽しい」になるまちへ」。まさにプランニングの民主化みたいな話とか、個人の妄想を、どういうふうに社会に落とし込んでいくのか、そういうのを HBP メンバーは実現できるようになってほしいし、僕も外のチームも含めてそういう仲間と一緒にワクワクする状況をつくっていきたいなと思ってます。長くなくなりましたけど、以上です。

【質疑応答】

質問者１；ややこしいけど泉と申します。難波の駅前のことでお聞きしたいことがあります。僕も少しだけ関わらせていただいたので、泉さんと知り合いになりました。実証実験終わった後に、警察協議で激震が走った、との話があったそうですが、もともと警察協議ありきでスタートしたと思いますが、なぜあのタイミングに激震だったのでしょうか？背景で何があったのでしょうか？教えていただけますか？

泉英明；それ、僕らも聞きたいぐらいなんです。調整済みと思っていたらそうでなかった。地元と大阪市が当時は険悪な関係になりました。大阪市の都市計画のみで道路管理者の建設局が入ってなかったのが原因だと思います。

篠原（JUDI 会員）；すごく思いのこもった話を聞かせていただきました。これまでに何度か泉さんのお話をお聞きしましたが、「まちづくりのまち医者」であるっていうこと、「化学反応」という言葉がいろいろなところに出てますね。議論を重ねて、思いを共有して、やるぞという雰囲気が出てきて、それが拡大していって、大きな熱になるというふうな、そういうふうなことを大事にしておられるんだというようにずっと思っていました。長門のプロジェクトも同じような流れなんだろうと思うんですけれども、後半で説明された、エリマネ団体のつくり方とか、再投資の仕組みとか、観光地経営に関する評価等の仕組みとか、すごく専門家の知識が要るようなことが、さらっとできているのだなと感じました。そういったところもすごいなぁと今日、あらためて思いました。それができるのは誰かそういう専門家がその場にいたのだろうと思うんですけども、その専門家を巻き込むのに泉さんがどういうふうに関わられてたのとかいう辺りを、もうちょっと聞かせてもらえたらなと思います。

泉英明；ありがとうございます。長門はエリマネが必要だとは当初から思ってたんですけど、なかなかそれまでに大変なことがいろいろ多過ぎて。まずは一番のシンボルの共同浴場を民設民営にする、絶対事業を成功させなきゃいけないし、プロポーザルで事業主体が誰になるかやファイナンスがつくか、全体のいろんな社会実験もあって、河川の活用、道路や交通、ランドスケープなど合意形成をどうとっていくのかなどです。具体的なアイデアはなくて、都心部のエリマネとは絶対違うし、みんなでお金を集めてやるっていう旅館組合の賦課金スタイルは限界が見えていた。なので、どういうスタイルがあるかを観光地でいろいろ調べたところ、入湯税と宿泊税に行き着いて。宿泊税は非常にハードルが高く、すでにある入湯税を検討しました。入湯税も普通にすると一般財源に入るので、全てエリアに再投資できる方法と主体とが全部セットでした。主体となるまち会社、入湯税と基金、ちゃんと動かすための評価委員会を一体的に考えました。なぜそう思ったかというと、水都大阪で痛い目見てたからですね。水都大阪パートナーズで僕らは毎年評価されるのですが、評価する人が代わっていくし、とんでもない人がとんでもないこと言いはじめる、上が代わるとどんどん違うこと要求される。別のところでもそういう経験をしてました。そこで相談したのが当時 JTBF の梅川さんで。彼が阿寒湖温泉で立ち上げた基金の仕組みのいいところと問題のところを教えていただき組み立てたような感じで、そこら辺は詳しくないことは適切な人に教えてもらってその都度対応しているような感じです。

篠原（JUDI 会員）；ありがとうございます。泉さんのこれまでの活動で知り合った人の中で「あの

人や！」と思う人にアプローチするということでしょうか。

泉英明；僕の知り合いの場合もあるし、知らなかったら、知り合いを通じて紹介してもらい聞きに行きます。行き当たりばったり的なのかもしれません。

質問者２；難波と申します。ご無沙汰しております。今日は私の喫緊の課題を解決してもらえるんじゃないかと思って、泉さんのお話を聞かせていただきました。私の関係しているのは、テーマを持って何かやろうという地域ではなく、普通の住宅地で、今は地域活動に関するアンケート調査やったりしているのですが、地域をよく知ってる人が中心となっている従来の組織が 10 団体ぐらいあります。中には若手の人もいるのだけれど、今の泉さんのお話のようなテーマ型の目的がはっきりしている地域活動ではないので、こういった普通のとこでは例えば 10 時から始まって 2 時までやるみたいなことは多分できないんですよね。そういった若い人たちをどうやってその気にさせていけばいいのか、もし何かアドバイスがあればお願いしたいという。無理な話だと思うんですけども。

泉英明；僕らも、さっきお話ししたんですけど、僕らは、やりたいっていうのは、なるべくニュートラルにしとかなきゃいけないんじゃないかなって、常に思ってるんです。大体、新しい地域にあるときには、50 人ヒアリングをするんですよ。面白い人リストを作ってもらって、行政の人とか民間の人に。その方々にお会いしに行きます。何かマスタープランやビジョンがあるから、これについてどう思うかっていうことではなくて、現状もう少しこんなことやりたいんだけど、こういうことやってるけどもっとこうならんかとか、ここ困ってるとか、誰が好き、誰が嫌いとか、そういうのを、いろいろお聞きするんですよね。そうすると、今でもできること多分あると思いますし、大きなビジョンを掲げてやるというよりは、個人の妄想とか、個人がどういうふうに何をしたいかっていうことを、全体の街が受け止められる仕組みをつくってあげれば、多分その人はやると思うんですよ。なので、僕ら、そっちから入っていってるので、特に絶対、ビジョンが最初からないとあかんっていうことでもなくて、そういう人たちの、例えば 3 人とか 5 人の、こういう街にしたいとか、これはやり遂げたいみたいなことを、逆にビジョンの内容に取り入れて、こういうビジョンで街を進めたらどうですかっていうのを、みんなに諮っていくとかですね。

質問者２；既存のオーソリティーとの関係はどうなんですかね。

泉英明；既存のオーソリティーからは、長門もそうなんですけど、いろんなこと言われました。どこでもそうですね。ただ既存の組織が今までいろんなことをされてこられて今があるので、それはリスペクトしたらいいと思うんです。また双方がいいと思える一段上のロジックやテーマを探して設定するのも有効です。新しくやろうとしてる人たちに反対をされなかったらそれでいいので、見守ってくれたらいいので。絶対応援してもらわなきゃいけないわけではなく反対はしないっていうところまで持っていければいいんじゃないかなと思ってまして。若い何人かの人たちも、僕らも一緒にですが、こういうことをしたいから見守ってほしいという仁義は切ってやってることが多いですけど。

質問者２；分かりました。どうもありがとうございました。

質問者３；学生の松木さんです。街医者が思う健康な街とは、どんな街ですか。また、がんを患っている街は、どのような街ですか？

泉英明；血行がいいところですね。ちゃんと、何かがあったらすぐ動ける関係性があるっていうところが、まち医者から見て健康な街。ガンは、若い人だけじゃないけど、何かやろうとしたときに、重しをつけられてしまう、新しい動きとか何かをやりたいっていうときに、応援しないだけじゃなくて、えげつないことをされるとか、そういう街ですね。

岸田（JUDI 会員）；きょうは東京から Zoom で失礼します。泉さんの話を聞くと、いつもプランナーの資質って何だろうとか、専門性とは何だろうというようなことを考えます。もともとは再開発から入り、ハードのプランナーとしてスタートしていますが、今日の話でも、デザインの調整から、利活用のルールから、さらに組織や制度のつくり方まで、今までにない新しいタイプのプランナーというか、事業推進コンサルという言い方もされていましたけど、こういうタイプの専門家が、どうやったらできるのだろうって、すごくいつも思っています。今日も違和感について話していましたが、泉さんが感じている違和感は、多分、多くの人が感じていて、この仕事していると、それを感じる場面はすごく多いと思うんですが、そういう人たちと泉さんは何が違うのかと思います。

長い付き合いの中で思うのは、泉さんのすごい行動力とか、誰とでも仲良くなるコミュニケーション力とか、特に僕がいつも感心するのは、決して人の悪口を言わないことです。ただ、今日の話だと、だんだん歳を取ってきて、妥協するところと、これは諦めないでやるっていうところのバランスもすごく身に付けて来ているなと思いました。話長くなってすいません。

今ではハートビートプランにも、たくさんの若い人が入ってきて、多分全国の若い学生さんたちにとって、ああいう仕事がしたいっていう憧れの 1 人だと思うんですが、泉スクールでは、どうやって次の泉英明を育てていくのでしょうか。僕は泉さんのチルドレンが、たくさん街に放たれて、街を良くしてくれたらいいと思うんですが、基礎的なデザインの能力というか、ものをつくっていく、再開発だとか、非常に苦労してきた若い時代があるからこその今がある訳で、最初から泉さんがやっているような仕事がしたいというような、ソフト重視で来た人たちを育てていくうえで、普段から心掛けていること、今日もプランニングの民主化で泉イズムがだいぶ言語化されて出ていましたが、心掛けていることがあれば、ぜひ教えてほしいと思います。

泉英明；ありがとうございます。岸田さんは一番最初に、私が独立したときに仕事をいただいた方で、同じ NPO メンバーでもあるんです。基礎的なことって、すごい大切だと思うんですよね。でも基礎的な業務って今はすごいしにくくて。マスタープラン関連の業務はたくさんあるんですけど、あんまり魅力的じゃない。その業務を受けてまちに貢献できて何かが変わるかが見えにくく、若いメンバーの少ない時間をどこに振り向けるのかって考えるとそんな仕事じゃないんかなと思ってしまうんです。でも、今の仕事の中で、なんばや長門や豊田もそうなんですけど、ベーシックな作業の型を遂行すること、こういうロジックを立てて次にこう進むなど、ふわふわしていることをやってるように思われるんですけど地味な作業がほとんどですね。そういうところで鍛えていって、ちゃんと基礎的な型を身に付けるのをやっていくのがいいんじゃないかなと、今は思ってます。

あとは地元に入って最低 1 年間は、言ってることは信用されないっていうか、全く聞かれてないと思ったほうがいいと事務所では言ってます。僕

は高松で同じこと言われたんですけど、泉がちゃんとしたことを言ってるのか、適当なこと言ってるのか、口だけなのか、それはちゃんと俺らが見てるからと。そういうベーシックな型もできるし、人が嫌がることもやるとか、信頼関係ができてはじめて本音を言ってくれる、困ってることを話してくれる。それがないと、いいことばかり聞いても、本質の問いが間違えてしまう。そういう関係をちゃんとつくれるコミュニケーション能力とか、誠意みたいなものっていうのは、一番ベーシックに大切かなと思ってます。それとさっきの基礎的な作業や技術があれば、その上は自分やっていったらいいんじゃないかなっていう感じですかね。僕と同じタイプになるのも気持ち悪いし。違ったのがいっぱい出てきたらいいんじゃないかと思うんです。

岸田（JUDI 会員）；ありがとうございます。例えば、さっきの難波の事例でも、どこかで誰かが道路構造令に基づいて描いたら、こんな絵になるというロータリーの絵を描いているわけですよね。道路構造令がどういうものだとか、なぜ行政がこんな絵を描いてしまうのかとか、そちら側の立場も、そういう作業を経験したら理解できるじゃないですか。そういう機会がない中で、全体の事業推進することだけを身に付けていくのってなかなか難しいかなと思った訳です。

泉英明；おっしゃるとおりですね。

岸本（JUDI 会員）；ハートビートプランの岸本です。新卒でハートビート、入って、今 8 年目ぐらい。結構、古株になりました。きょう泉さんが話してたことは、いつも言ってることだなっていう感じです。

さっきの岸田さんの話も、泉にもよく言われるんですけど、私も。俺はずっと、そういう地道なことやってたけど、おまえはそういうこと、一切やってないと。けれど、それはそれで、そういうのはやってないけど、だからこそ、そこは泉さんがあえて私にショートカットされてくれてると思ってるんです。なので、泉さん、次の世代、次の次の世代ぐらいとして、そこをショートカットしたぶん、もう少し先、泉さんが行けなかった先に行けるんじゃないかなって思ってます。

福田（JUDI 会員）；楽しい話、ありがとうございました。僕、多分一番長い付き合いかもしれない。31 年です。体と心の健康を、どう保ってるかを、聞きたいなと思ってます。僕が見たのは一回だけ、年末に調子悪いのに、わざわざ来てくれたときがあって、それだけが覚えてるのですけども。よく食べるし、よく飲んでるし、夜遅くまで仕事してるし、こんだけステークホルダー中でもまれてるのに、あんまり体悪そうにも見えないし、ですけど、どうやったら 50 年間健康でいられるんですかね。

泉英明；あまりストレスたまらない感じなんで、それが一番かな。食べたいものを食べて、飲みたいものを飲む。でも一日一食。一日一食なんですけど、その代わり食べたい放題、飲み放題。そんなんじゃないですか、健康の秘訣は。あと、嫁さんが、ちゃんといい飯を作ってくれてるってのはありますね。

福田（JUDI 会員）；家で飯、食ってんの？

泉英明；食ってる。ほんのときどき。あとは、ちきしょうっていうくやしいこと、うまくいかないこといっぱいありますよね。ちきしょうっていうときには、なるべく、ちきしょうって一緒に分かち合える人と、飲んで解消するっていう、そういうことですね。

福田（JUDI 会員）；ありがとうございました。

【総括】

鳴海邦碩　セミナー委員長

こんばんは、会場に行けなくて、どうもすみませんでした。

今日は、随分長いというか、泉さんの、一からの仕事を非常に詳しく聞かしていただきました。時系列的な展開、いわば泉流まちづくりの歴史、そして分野的なひろがり、いわば泉流まちづくり世界を聞くことが出来ました。それはそれで素晴らしいことなのですが、今、福田さんが、それから岸田さんも同じような内容のことをおっしゃられたと思うのですが、泉流の仕事の広がりをどうやって伝えていくのか、あるいは次の若い人たちにバトンタッチするためには、もう少し表現の工夫があればいいな、そういう期待も皆さん持たれたのではないかと思います。

泉さんが示したスライドにはたくさんのキーワードが出てきます。そのキーワードを並べてみると、一つの物語が透けて見えるな、ということを感じました。一種の解釈論ですね。

今日の記録が出来たら、そこに出てくる言葉を編集してみると、これから取り組むべきまちづくりの方向がみえるのではなかいと思います。JUDI セミナーの担当の人たちでやってみたらどうでしょうか。

ヒントの一つは福島の復興のお話しにあると思います。まちづくりの要素として、住民が手に負えないインフラとかそういうものと、住民の手の中にあるまちづくりの乖離が、とても大きい。そういうことに今回直面したわけですが、その扱い方に泉さんの仕事の底流があるように思いました。そういうテーマがいくつか発見できると思います。それを、来年の JUDI のセミナーとか、そういうことに発展させていければいいなと思っています。

泉さんには、またそのうち、いろんな質問を投げ掛けたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。今日はどうもありがとうございました。

（了）